

尾道商業会議所記念館 第31回企画展示解説

2016年10月28日～2017年3月1日

テーマ 西国街道をゆく～尾道本通りを歴史散策～

東西に1.2kmと続く細長い尾道本通り商店街は、中心部の顔的な存在として、市民や観光客に愛され、親しまれるメインストリートです。

老舗から新しいお店まで、様々な業種のお店が数百軒と軒を連ね、散策するだけでも楽しい本通りは、また一方で、歴史のメインストリートでもありました。

江戸時代の本通りは、近世山陽道でもある「西国街道」の道筋に当たり、通り沿いには今と変わらず多くの商家が軒を連ね、公的機関では尾道町奉行所が位置した他、殿様などVIPの滞在先となった「本陣」もこの通りに所在しました。

そんな歴史街道でもあった尾道本通り商店街のその昔の昔に、江戸時代後期に描かれた「尾道町全図」（本通り部分）を頼りにタイムスリップしてみたいと思います。

本展で基礎的な情報を得られたところで、当館を振り出し地点に実際に散策へ出発して頂き、いつもとは違う視点・角度（ブラタモリ的なまなざし）で、本通りウォッチングを楽しんで頂ければと思います。本通り再発見の旅へ、いざ…

【尾道町全図】 江戸後期の尾道町内を概観

1821（文政4）年亀山家旧蔵・尾道市立中央図書館蔵
当全図は、江戸時代から近代にかけての豪商・亀山家（屋号・油屋）が旧蔵したもので、江戸後期の当主で、文人墨客とも親しく交わるなど、商人であり文化人でもあった亀山士綱（雅号でシコウ、名は元助）が作成したものと伝え、同時期に士綱が編纂した尾道の地誌『尾道志稿』と共に、広島藩の地誌として編まれた『芸藩通志』の基礎資料として作成された可能性もある。久保・十四日（十四日元町～長江）・土堂の尾道三町内に連なる町家部分を一軒ずつ記載した町割図。全図全体を広げると、畳数畳分にもなる大きさで、本通り筋を軸に、当時の尾道町の様子をビジュアルで概観できる一級の資料である。

奉行所～浮御堂



①尾道町奉行所 おのみちまちぶぎょうしょ

当時の市役所・警察署・裁判所の機能を担った広島藩設置の役所。尾道町奉行の任は1715（正徳5）年より設置され、以降明治元年まで、40代41人が尾道に在って町政全般を管轄しました。住吉浜築調の功績で名譽市民第1号となった平山角左衛門は第13代の町奉行となり、1740（元文5）年1月15日～1741（寛保元）年1月26日に亘って在任しました。当尾道商業会議所記念館及び広場の一帯は奉行所の敷地になります。明治以降は、御調・世羅郡役所、尾道警察署などが所在するなど、公的機関のスポットとなっていました。

②平田玉蘊の生家・福岡屋 ひらた・ぎょくおん（うん）

奉行所前の通り西端の一角に、「福岡屋新太郎」の屋敷地が見えます。木綿問屋を営むこの福岡屋・平田新太郎の娘（四姉妹の次女）として、尾道に花開いた女流画家・平田玉蘊（ギョクウンだが尾道ではギョクオンと呼称、名は豊、後に章）は生まれました。父親である新太郎も絵を嗜み、池大雅の門人であった福原五岳に学び、雅号は五峯と称しました。玉蘊は父に続いて五岳に学んだ後、四条派の八田古秀にも学び、特に花鳥風月を得意とする画家として活躍しました。二十歳の時に父・新太郎が没した後は、絵筆一本で家を支え、69歳でその生涯を閉じます。屋敷の後方山手に位置する持光寺の墓所に眠ります。



《西王母図》一幅絹本着色 /100.2×34.3cm
尾道市立美術館蔵

③浮御堂 うきみどう

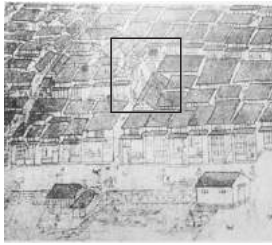
宝土寺大門下、海岸通りへ通じる小路を、「浮御堂小路」と呼び、その先の海岸端へ小路の名の由来となる「浮御堂」が見えます。全図と同時代の地元地誌『尾道志稿』が記すところによれば、山号は海頭山と称し、京都の醍醐寺三宝院の末寺になり、紀州熊野本宮の僧侶が尾道浦に至り、奇瑞を得てお堂を建立するに至ったとあります。海上に突き出す形で構えられたお堂は、まさに波間に浮くお堂の如くとの事での命名になります。今日では既に跡形もありませんが、附近にはエビス様と竜王神を祀った石祠が建ち、その下には地面に埋まり、上半分を地表に覗かせる「力石」が見られます。この祠と浮御堂との関係は不明です。

渡し場～曲がり



④曲がり まがり

本通りの中程、現在の尾道郵便局の前の道は、鍵状に折れ曲がった形をしています。この界限を指して、古くから「曲がり」と地元では呼び慣わし、付近のお店を言う際には「曲がりの何某」で通ってきました。みさか商店の前が斜めに削れているのは、本通り路線を運行していた市営バスが、この曲がりをスムーズに進む為に造作したと古老の証言に聞かれます。町全図の時代に比べると今日では緩やかになっているとはいえ、それでも曲がった感は今も健在といえます。街道筋ではこうした曲がりが意図的に設けられたようで、元来は敵の侵入を防ぐ防衛的な意味合いがあったようですが、大半は近代の道路整備で改変された所が多いようです。



尾道絵屏風より曲がりの部分
1774(安永3)年 原本・浄土寺宝物館蔵
尾道市指定重要文化財の「尾道
絵屏風」(通称・安永の屏風)に描
かれた内から、「曲がり」の部分。
全図では直角に曲がり、傍らには
小さな社祠が見える。

⑤荒神堂小路 こうじんどうしょうじ

千光寺へと続く参道(昔からの旧参道)下の本通り界限を、「荒神堂(町)」と称し、海岸へ通じる小路を「荒神堂小路」と呼びます。由来は町全図に見える「荒神社」にあります。現在はその場所に無く、長江の良神社境内に移し祀られています。同社の詳しい来歴については不明ですが、火の神・かまどの神としても信仰されたようです。その下の区画は「般若院抱」とあり、こちらは西国寺の末寺であった般若院(西国寺山に所在したが廃寺)の抱え地=所有地という事を示しています。往時は南の中央棧橋(荒神堂棧橋とも呼ばれた)に出入する船人の往来で賑わい、「間口一間奥行半間の店でも商売になった」と語り草に伝えるほどです。



町全図より荒神堂界限

薬師堂・長江口界限



⑥薬師堂小路 やくしどうしょうじ

本通りの中心部、長江口から海岸へ至る道を「薬師堂小路」と呼びます。町名としては薬師堂町と呼ばれましたが、地名の由来は「薬師堂」と通称されるお寺が所在した事に因みます。薬師堂こと「成福寺」は、常称寺(西久保町)末寺の時宗寺院で、薬師如来が本尊として安置されました。現在ではその痕跡を偲ぶものは何一つ見えませんが、界限を発掘した際、赤い鳥居が土中から姿を現し、境内に鎮守として祀られていた稲荷祠のものではないかと目されました。そのお稲荷さんは廃寺となって以降は長江の良神社境内へ移り、本尊の「木造薬師如来立像」(市指定重要文化財)は本寺である常称寺の内で安置されています。



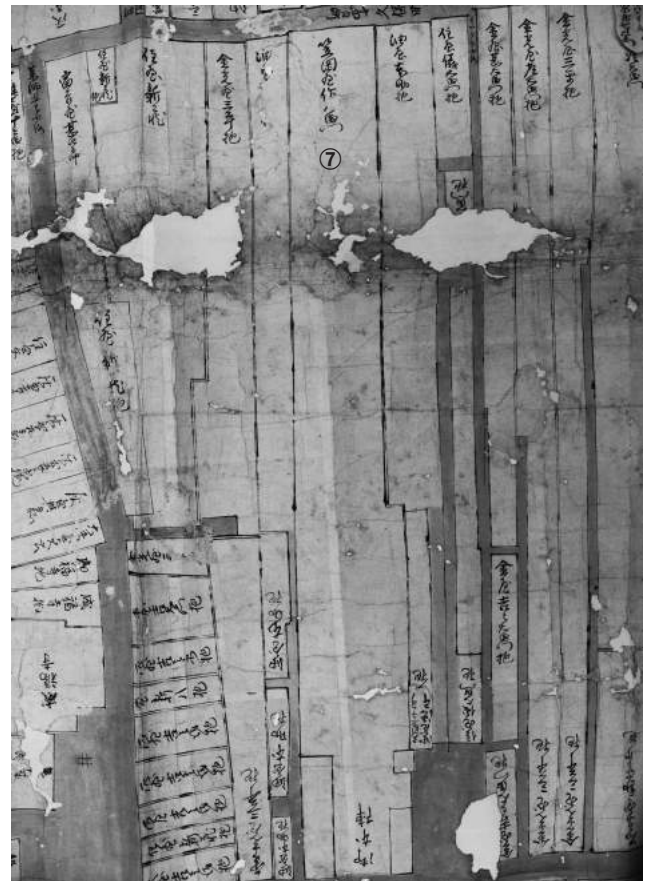
薬師堂本尊・木造薬師如来立像
尾道市指定重要文化財
室町時代 寄木造 像高40cm



薬師堂(成福寺)開帳寄進目録 尾道市蔵(常称寺寄託)

本寺である常称寺所蔵文書の内に遺された成福寺の薬師開帳に寄せられた寄進目録で、時期は1764(明和元)年12月。金銭以外では、餅や幕などの供物や物品の寄進も見えます。また、寄進者は商家などの個人から町内有志などのグループ単位とこちらも幅広い信者の層が確認される。

本陣 笠岡屋



⑦本陣ほんじん

薬師堂小路から東へ少し行くと、通りの南側の屋敷の内に「御本陣」の文字が確認されます。本陣とは、武将が戦場で構えるそれとは別のもので、大名や公家、幕府の役人など、要人が訪れた折の宿舎としての本陣です。宿場町において設置され、本陣に次ぐ格を備えた「脇本陣」と共にVIP達の利用に供されました(一般の宿泊は出来なかった)。

尾道の本陣を担ったのは、豪商の中でも歴史の古い「笠岡屋」こと小川家でした。小川家は毛利輝元の家臣でありましたが、尾道へ至り商人に転じました。小川又左衛門の代には、朝鮮出兵に伴い大阪と九州名護屋間を往来した豊臣秀吉が、同所で宿泊したとの伝説も伝えます。

太閤秀吉の本陣滞在伝説

笠岡屋小川氏の本陣屋敷には、太閤豊臣秀吉が宿泊したとの伝説があり、同家が伝えた古文書（小川家文書）にその経過が綴られる。

時代は朝鮮出兵（文禄期と伝）の時、大阪と前線基地となった九州肥前の名護屋城（佐賀県唐津市）往還の道中であったとする。

江戸後期に編まれた地誌『芸藩通志』、『尾道志稿』によれば、秀吉の座した部屋は「太閤御座の間」として今に語り継がれていると記されており、また、見送りの際に秀吉から褒美を賜ったともいう。

主人である小川又左衛門は、尾道町内随一の井戸水（長江の柳水井・今は飲用不可）で点てたお茶で秀吉をもてなした逸話も伝える。

ミヨノ小路～石屋町界限



⑧ミヨノ（水尾）小路 みよの・みずおしょうじ

本陣から本通りを更に東へ進むと、「ミヨノ小路」と記された小路が見えますが、今日の「水尾小路」であり、旧地名ではこの界限を「水尾町」と呼びます。水が尾を引くというような意味合いに受け取れますが、この水に該当するものと思われるのが、本通り北側の小路奥に鎮まる「熊野社」（通称・熊野権現）へのお供水として、お宮のすぐ下に今も湧き出る「水尾井」（井戸）。心地よい涼を呼ぶ夏祭りとして知られる熊野神社例祭の「水祭り」は、まさにこの地名にふさわしいものがあります。小路西側、通りに面した一角に「御銀札場」とありますが、「銀札」とは広島藩が発行した銀貨代用の紙幣を指し、その取扱いの施設があったことが分かります。

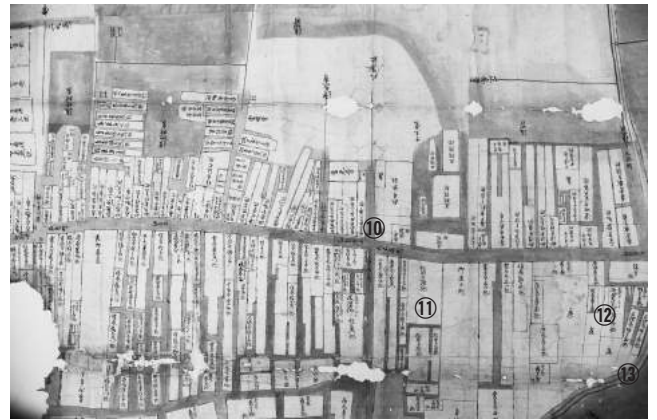
⑨石屋町 いしやまち

常称寺大門前の界限は、石工の職人が集住した職人街である事から、「石屋町」と名付けられました。尾道石工の歴史は古く、現在確認されている作品で最古例は、愛媛県松山市の道後温泉にある石造湯釜で、戦国（室町）時代の1531（享禄4）年の刻銘が見られます。「尾道石（細工）」も当時の尾道産物として名高いものがあり、北前船の寄港地である山陰・北陸・東北・北海道にかけて、尾道石工の手になる石造物が点々と見られます。市内にも石工の腕が光る優品・名品が多く遺り、御袖天満宮の55段の石段、尾道一の大きさと典型的な尾道型を示す久保新開の厳島神社の狛犬等々、石工アートを巡って観るのも一興です。



厳島神社の狛犬

東端界限



⑩八幡鳥居 はちまんとりい

石屋町から本通りを東進すると、通りに面して山手側に、久保町の氏神社である亀山八幡宮（通称・久保八幡神社）の鳥居が、威風堂々といった雰囲気漂わせながら建っています。最上部の笠木部分の反り具合が実に見事且つ美しいのが特徴で、これも尾道石工の技を示す一例です。鳥居は江戸時代の前期、1659（万治2）年に石屋町連中から寄進されたもので、旧尾道市内では最もスケールの大きな鳥居と目されています。八幡宮の境内奥には、石工が守護神として崇め祀った「高御倉神社」も見られます。この八幡鳥居から真南直線上に厳島神社（明治以降に八坂神社を合祀）が相対し、二社の神様が向き合う格好を呈しています。



八幡鳥居

⑪松田卜隠 まつだ・ぼくいん

八幡鳥居の傍ら、通りの南側に並ぶ屋敷地の一角に、「松田卜隠」という名前があり、卜隠というその名に何やらありそうなものを感じます。同氏は上野国（群馬県）の出で、北条氏に仕える武士でありましたが、時宗二祖の他阿真教上人に帰依し、侍医として諸国遊行を共にし、上人と共に訪れた尾道へ定住、町医者としてこの町の内へ溶け込みました。卜隠の創製した「阿伽陀円」という薬は、「無病不死の妙薬といわれ、あまねく衆疾病を去るといい、この薬を服用すれば、病あれども無きが如き状態を招来す」と江戸後期の地誌『尾道志稿』に紹介され、石細工・酒・酢等と並ぶ尾道名産としてもピックアップされています。墓所は常称寺にあり。

⑫橋本の茶園・爽籟軒 そうらいけん

尾道では、富裕な商人・町人が構えた風雅な別荘・庭園を指して、「茶園」と書いて「さえん」と呼称しました。江戸時代から近代にかけて、千光寺山の山手斜面地を中心に向島側も含めて各所に茶園が築かれ、主人は文人墨客を始めとする賓客を招き入れるなどして、尾道文化のサロンをそこに形成しました。その茶園の一つが、本通り東端部に位置する橋本家（屋号は角灰屋）の茶園「爽籟軒」です。庭園部にある茶室「明喜庵」は、京都山崎にある千利休ゆかりの茶室「妙喜庵待庵」（国宝）の写しとされる貴重なものです。茶室を含め庭園は尾道市の管理で公開されており、茶室は茶会等で利用が可能。土・日・祝日のみ開園で入園料は百円。



爽籟軒茶室



爽籟軒庭園

⑬防地川 ぼうじがわ

本通り東端を抜け、街道は北側の鉄道高架を潜り、防地通りへと続きます(防地峠を上がると広島(芸州)藩と福山藩境の「番所」が位置する)。

この防地通りから海岸へ向けて、現在は暗渠となつて車道となっていますが、当時は「防地川」が流れていました。そして川をまたいで四つの橋が架かり、上から順に「ちよぼが橋」(この橋だけ何故か「バシ」と読みが濁らない)、「嬉志野橋」、「新橋」、「渡瀬橋」で、この内最も大きかった新橋は、大正天皇の御大典記念で木橋から石橋に造り替えられ、暗渠となった1934(昭和7)年以降は、浄土寺東の海龍寺前から続く山道の入口へ移築され、今に現存します。



防地川の新橋完成記念絵葉書 大正期 原本・尾道学研究会蔵
防地川に架かる橋の中で最も大きかった新橋の完成記念で出された絵葉書。一部分の写真ながら、新橋を記録した写真が殆ど確認されていない中であつて貴重な一枚である。

尾道本通り商店街

【一番街】～少女時代の芙美子の足跡を偲ぶ～

尾道ゆかりの作家・林芙美子像が建つ商店街西端に位置するのが駅前本町一番街商店街です。一番街の界限には、芙美子を通った土堂小学校、作品タイトルを冠した「うず潮小路」、間借りしていた住居跡が残る、まさに「芙美子通り」の商店街です。

芙美子一家の旧居を有するインフォメーションセンターには資料を展示した「フミ子ギャラリー」がしつらえられ、貸しギャラリーとしても利用されています。

【中商店街】～尾道ゆかりの住友銀行の歴史～

一番街とセンター街の中間に位置するのが「中商店街」です。5商店街の中では一番短いですが、奉行所跡、石畳小路など尾道らしい歴史の見所がたくさんあります。

尾道商議会議所記念館の傍に建つ住友銀行尾道支店は、明治期に遡る歴史を持ち、尾道の近代史を語る上でも一つのトピックスとなっています。



5つの通りで構成される「尾道本通り商店街」は江戸時代の西国街道そのままに「尾道本通り」として今も尾道のメインストリートです。尾道市街地観光案内地図より

1873(明治6)年に現在地の土堂へ住友家の尾道分店が開かれ、続いて鉄道が敷かれ(1891・明治24年)、海陸交通の結節点ともなった尾道において、住友大阪本店と愛媛県新居浜の別子銅山(住友経営)から重役が尾道に集い重役会議(通称・尾道会議)を開催(1895・明治28年)。ここで住友の銀行業参入が決定するに至りました。そこから、尾道は住友銀行発祥の地としての歴史を秘めることになりました。尾道支店の開設は大阪本店、神戸支店、川口と兵庫の出張所に続き、5番目となります。

土堂の現在地から一時期(明治後期～昭和初期)、久保(米場町)へ移転しましたが、その時の建物が尾道市所有の建物として今に現存しています。

【本町センター街】～奇祭として名高い一宮さんのベッチャー祭り～

本町センター街の一角に、神輿を安置する「御旅所」(おたびしょ)が設けられています。こちらはすぐ山手に位置する吉備津彦神社、通称・一宮(いっきゅう)神社の常設御旅所で、神輿と共に同社の祭礼「ベッチャー祭り」に登場するソバ・ベタ・ショーキーの三鬼神の奉納面(実際にかぶられる本面ではない)も展示されており、一年間を通してベッチャーに接することの出来るスポットです。

ベッチャー祭りは毎年11月1日～3日にかけて賑やかに執り行われる一宮さんの大祭で、神輿の先祓・先導役で繰り出す三鬼神と獅子頭が無病息災・厄祓いを祈念して子ども達を追いかけ、子ども達の歓声と囃子太鼓の音で街中が沸き立つ晩秋の風物詩となっています。

三鬼神の面と獅子頭は、その昔の祭礼で売られていた張り子製の郷土玩具で、今日では見ることの出来ない幻の郷土玩具となっています。

【絵のまち通り】～全長約385m 本通り一長い商店街～

本通り商店街のちょうど真ん中に位置するのが「絵のまち通り」商店街です。千光寺参道と中央棧橋をつなぐ「荒神堂小路」や、十四日(とよひ)町(長江)と土堂町の境界線となる「浜ノ小路」、東端には、「薬師堂小路」など歴史を秘める小路・通りがあります。

【尾道通り】～本陣の歴史と小路が点在する商店街～

本通りの東ゾーン、長江口ゆりの広場から始まる「尾道通り」商店街には、江戸時代にVIP(大名や幕府高官等)専用の宿泊施設であった「本陣」の屋敷を始め、豪商中の豪商と言われる灰屋橋本家の屋敷(後に本通り東端の爽軒軒へ移る)、更に古い豪商の笠岡屋小川家(本陣の主人)、泉屋、今蔵屋といった歴史的な商家が軒を連ねた通りでした。

また、そうした商家名に由来する「小川小路」、「今蔵小路」、「三好屋小路」などの小路が点在しており、その他にも、「子育て幽霊」の民話に登場する「丹花(たんが)小路」、夏の「水祭り」で知られる「熊野神社」への参道にもなる「鎮神小路」など、小路めぐりも楽しいものがあります。尾道通り商店街では、こうした小路を再発見してもらおうと、「尾道通り界限散策マップ」も作成されています。